

抑うつ傾向が虚記憶に及ぼす影響

○山村 祥太郎¹・吉田 弘司²

(¹比治山大学大学院現代文化研究科, ²比治山大学現代文化学部)

目的

抑うつ状態は、ネガティブな記憶想起の過剰、心的事象の基盤的处理能力の低下といった影響を記憶機能に与え、ネガティブな解釈を行う恣意的推論、ネガティブな情報に注目する選択的注意といったスキーマを持つと考えられる。また、松本・望月(2013)の研究では、記憶の中の情報は常に正しいとは限らず、変容することが知られている。虚記憶は、実際に経験していないのにも関わらず、あたかも経験したかのように、もしくは経験していても誤った形の記憶として情報を保持してしまう記憶である(Loftus, 1997)。Bartlett(1932)は時間経過によって、記銘した情報が参加者のスキーマにあった形で合理化され、変容していたことを報告している。

本研究では、抑うつ傾向が虚記憶に及ぼす影響について検討を行う。仮説として、抑うつ傾向の高い群ほど、低い群と比べてネガティブ語を想起しやすい状況において、虚記憶が形成されやすい傾向を示すのではないかと推測される。

方法

実験参加者 大学生 50 名が参加した(男性 17 名, 女性 30 名, 無回答 3 名, 平均年齢 18.28 歳)。

実験材料 熊(2024)の実験で使用された虚記憶リストを使用した。1 リスト 16 項目(ルアー語 1 語)で構成されているネガティブ語リスト・ニュートラル語リストを 4 リストずつ、計 8 リストを使用した。

手続き 抑うつ傾向を測定するために、日本語版 CES-D(島・鹿野・北村・浅井, 1985)を実施した。その後、熊(2024)で使用した虚記憶リストを視覚提示した。各語は 1.5 秒提示し(提示間隔は 0.5 秒)、その後再認課題を実施した。再認課題は、各リストにつき、ルアー語 1 項目、学習したリスト語 3 項目、未学習リストのルアー語 1 項目とリスト語 3 項目の合計 8 項目で構成され、各項目をランダムに提示した。参加者は、提示された単語について学習段階に見たかを「1=まちがいで見えていない」「2=たぶん見えていない」「3=たぶん見た」「4=まちがいで見た」の 4 件法で

回答した。

結果

参加者を CES-D 得点 16 点以上を高群、それ未満を低群に分け、各感情語リストのルアー語に対して 4(まちがいで見た)と答えた反応率を算出した(Table 1)。群×感情の分散分析の結果、群の主効果のみが有意で($F(1,48) = 4.15, p = .047, \eta^2 = .08$)、抑うつ低群は高群よりも反応率が高かった。また、学習リスト語に対して 4 と答えた反応率(Table 2)については有意な主効果も交互作用も認められなかった。

考察

本研究の結果、抑うつ低群の方が高群よりも虚記憶が形成されやすい傾向にあることがわかった。学習語に対する再認反応には差がなかったことから、これは単純な記憶力の違いに起因するとは考えられない。抑うつ低群は情報操作によってある意味でだまされやすいのかもしれない。また、抑うつ低群と比べると、高群はルアー語に対して 2(たぶん見えていない)・3(たぶん見た)と回答した割合が多かった。これは、高群の方が確実に見たと自信を持つことが出来なかったからではないかと推察される。

また、虚記憶が形成されにくかった抑うつ高群は、感情の影響も認められなかったことから、虚記憶の形成メカニズムと抑うつとの関連性についてはさらなる研究が必要であろう。

Table 1

抑うつ高群・低群の各感情語ルアー語に対する反応4の割合

	低群	高群
ニュートラル語	0.76	0.62
ネガティブ語	0.77	0.63

Table 2

抑うつ高群・低群の各感情語学習リスト語に対する反応4の割合

	低群	高群
ニュートラル語	0.73	0.74
ネガティブ語	0.73	0.73